

日本館トークイベント
日本館からつながる「循環」～文化、技術、そして未来へ～
令和7年9月23日（火）

伊勢神宮の森と持続可能な地球環境 ～第六十三回神宮式年遷宮を控えて～

神宮司庁 広報室次長

神宮参事 音羽 悟

山口祭 五色の幣串を小工が舁く

生調（いきみつぎ）として鶏（小国）が供えられる。



山口祭 内宮は岩井田祭場（神路山）、
外宮は土宮南の高倉山の山麓で斎行。



木本祭

新宮の御床下に奉建する「心御柱」のご料木を伐採するにつき、御木の木本に坐す神を祭る祭儀。深夜両宮域内の山中で行われる秘儀で「物忌」と称する童男（内宮）・童女（外宮）が忌斧を執って御料木奉伐の儀を行う。内宮は御稻御倉、外宮は外幣殿に安置される。



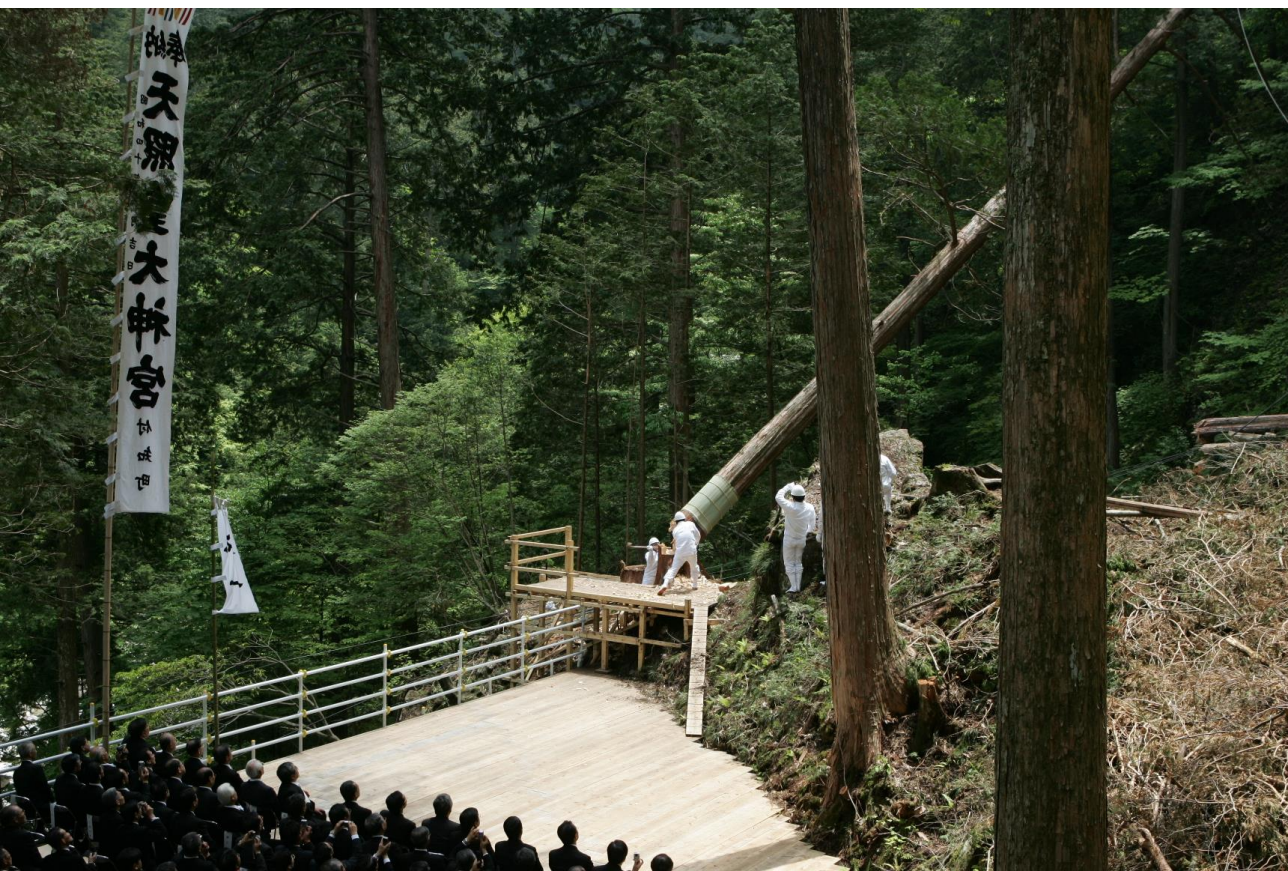
御杣始祭 長野県上松町

御神体をお納めする御樋代のご料材を伐採する祭儀。



裏木曾御用材伐採式

岐阜県中津川市加子母



御神木奉搬



御樋代木奉曳



御樋代木奉曳



御樋代木奉曳

火除橋より内は官曳。



御樋代木奉曳式

五十鈴川を遡り、風日祈宮橋の袂から引き揚げる。



御樋代木奉曳式

五丈殿前まで奉曳・安置。



神路山 第二宮域林

4,355 haの土地のうち2,916 haを檜の造林にあてる。



川口萱地

冬場に国崎の海女が奉仕 八年ほどかけて萱山から採取。



御用材

御杣山としての後継木

二重線が後継木となる。



種取りと三緒伐

親檜から種を採取 三方向から斧を入れる。



鳥総立て神事
と末をお返りする。

料材の中間を頂戴し、山の神に元



神宮式年遷宮 造営

簀屋根の中で部材が組み合わされる



御船代祭 内宮

風日祈宮橋南詰東側に宮山祭場を定め、木本神を祭り、物忌（童男）が草木を刈り初め、小工が伐採の式を行う。

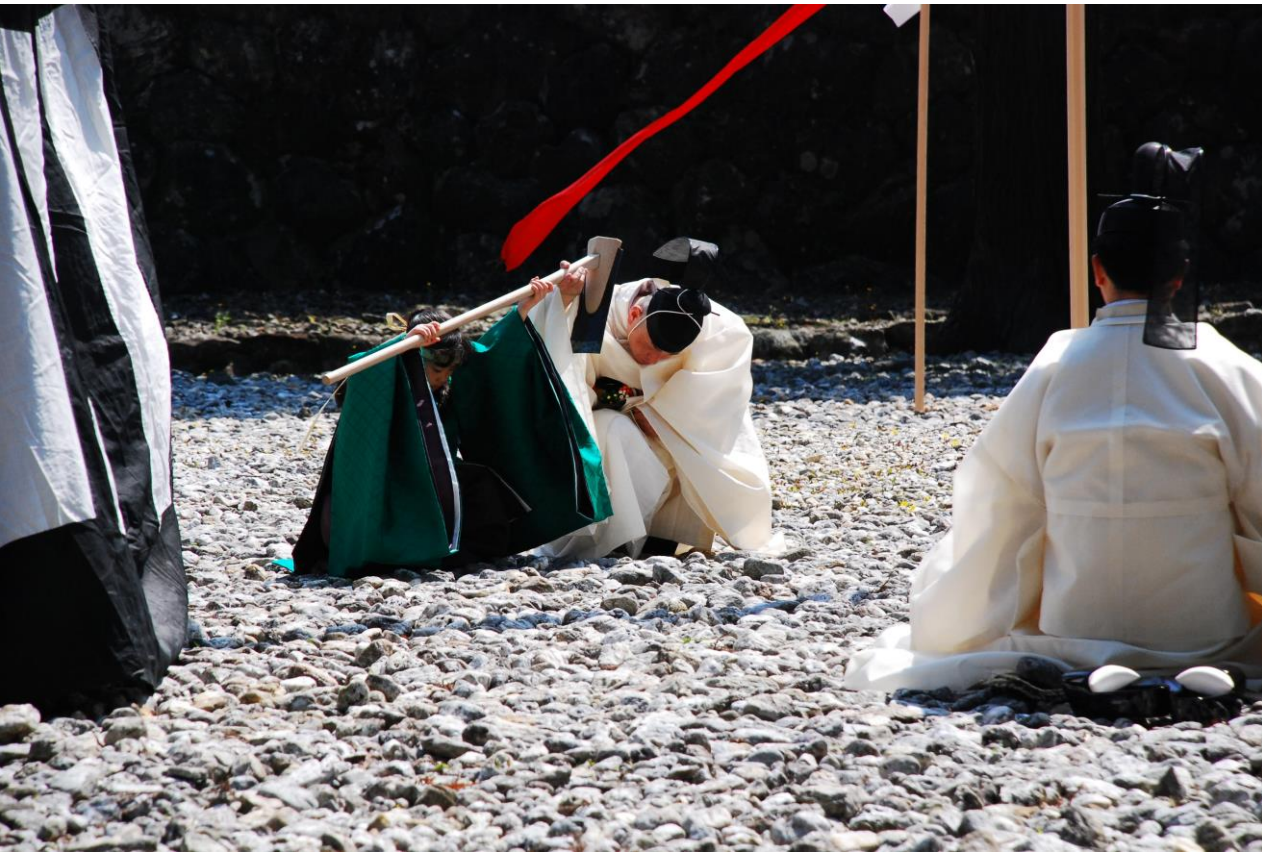


御船代祭 外宮（多賀宮）

土宮南の宮山祭場で物忌（童女）が草木を刈り始める。



鎮地祭 物忌（童女）が奉仕 向かって左が内宮 右が外宮



鎮地祭 屋船大神をお祀りする。物忌父
が童女の介添えをする。



式年遷宮 立柱祭と上棟祭



式年遷宮 檐付祭



萱（すすき）の清刈



御正殿の高欄の取り付け



お白石持行事



神宮式年遷宮 川原大祓と遷御



遷御の儀

神儀が新宮に遷られる 神宝の渡御列



神宮式年遷宮 大御饌と奉幣



伊勢神宮の森と持続可能な地球環境

神宮司庁広報室広報課長 音羽 悟

今日日本の国立公園は34箇所を数えるようであるが、伊勢志摩国立公園は実に私有地が90パーセント以上に及び、その多くを伊勢神宮の森が占めており、5,500ヘクタールを有する。自然公園法に基づき、神宮では高さ13メートルを超える建造物は建てていない。101.8メートルの木造建築の宇治橋を渡り、神域に入っても森に隠れて建物らしきものは見えないような境内の空間が広がっている。神宮の殿舎は周囲の自然と調和して遠目では気がつかない造りになっているのだ。しかし近くに来ると、その荘厳な造りに誰もが圧倒されるようで、自然と一体となった建物の格調をうまく引き出している。



伊勢神宮の敷地面積の大部分が宮域林である。宮域林は、実は100年足らずの新しい森で、大正時代（19世紀初頭）に経営計画された森である。大正11年（1922）に神地保護調査委員会が置かれ、林学の大御所、植物専門家10名が委員として名を連ね、如何に管理していくかが審議された。まず神域と共に神宮の尊厳保持を目的に宇治橋附近から見渡せる山全体を風致林として天然林で残すように決められた。それが1,094ヘクタールの第一宮域林である。ここでは枯れた木とか余分なものは伐るが、それ以外は自然のまま残している。針葉樹、広葉樹、常緑樹、落葉樹と様々な樹木で構成されている。



次に宇治橋から見えないところ、ちょうど反対側に4, 355ヘクタールの第二宮域林があり、そのうち2, 916ヘクタールの土地で檜の植林が行われている。1, 300年の伝統文化を持ち、20年に一度繰り返し行われる、日本の皇室、神宮、日本国民にとって重要な祭儀である「式年遷宮」にはたくさんの御用材を必要とするので、200年という長期展望を以てを作ろうとしている。



宮域林は、伊勢神宮の尊厳並びに風致の保全と五十鈴川の水源涵養に大きな役割を果たしている。現在、神宮の宮域林の天然林は典型的な照葉樹林として世界的にも有名になってきた。しかし江戸時代長きに亘り、伊勢の町民や膨大な参詣者のために薪や炭焼きとして神宮の森から木がすっかり伐り出されて、明治維新当時（1868年頃）は既に禿げ山と化していたと思われる。その結果17世紀以降は五十鈴川の氾濫や山崩れが多くなった。殊に大正7年の水害では、朝熊山の雨計量が一日350mmを計測し、豪雨のため宮域林内で199箇所の崩壊が発生し、五十鈴川の水位が宇治橋を上回ったと言う。内宮の門前町も殆どが水に浸かり、床上浸水が1,400戸位と相当の大洪水だったのであろう。こういった災害を防ぎ、五十鈴川の水源涵養をはかることは、神宮と伊勢の住民とに共通する重要課題となった。と同時に神宮社殿を囲む森を古代の豊かな森に戻しつつ、遷宮用材を自給する御杣山を復活させることも当時急務とされた。林学の先駆者、東京帝国大学農学部部長の川瀬善太郎、林学者本多静六などが中心に「神宮森林経営計画」を作成した。以上の理由で針葉樹と広葉樹の混交林が結成され、檜や杉の単純林よりもうまく循環するという森林生態系に好結果をもたらしたのである。今日宮域林の保水力は著しく向上して、昭和57年（1982）8月に発生した一日455mmの降水でも崩壊はなかった。



最近SDGsという言葉をよく耳にする。持続可能な開発目標として、伊勢神宮の森はSDGsそのものと言っても過言では無い。神宮の森の中で木の葉の舞う姿は、これから先、誰もが目にする光景となろう。大自然の営み・循環は不変である。新たな木々の芽吹きのために土に身をかえいのちをつなぐ。永遠を約束する自然と共に生きる、老化しない精神性に地球環境への適合の定義が見いだされる。それは20年に一度斎行される神宮式年遷宮の理念にも通ずるのである。

